

# どくとくのひろば

No.  
35

## こころのひろば

えりも砂漠の緑化が始まって70年  
まだまだ折り返し地点でしかない

[飯田 英雄] ..... 2

## 特別企画

「深い学び」と「問い返し」を考える

[島 恒生、川野 貴寛] ..... 8

見てわかる！ 道徳

「生命の尊さ」「自然愛護」

[越智 貢、上村 崇、奥田 秀巳] ..... 12

実践事例【小学校1年】

児童の思いや願いを中心に据え、  
児童自ら学びをつくる道徳科

[梅野 栄治、宮里 智恵] ..... 14

こんなコト、聞いてみました！

道徳授業に自信がない先生に  
声をかけるとしたら？

[立花 英夫] ..... 18

地球の仲間からのメッセージ

へび

[長瀬 健二郎] ..... 19



日文 Web サイト

日文 🔍



# こころのひろば



い い だ ひ で お  
**飯田 英雄**

Profile

えりも漁業協同組合  
ひだか南森林組合

父親の飯田常雄さん同様、コンブ漁師であるとともにえりも緑化事業の中心人物として長年尽力している。また、えりも町中高一貫教育の体験授業への協力も行っている。

## えりも砂漠の緑化が始まって70年 まだまだ折り返し地点でしかない

関連する SDGs 目標



明治時代の開拓により森林伐採が進み、一時は砂漠と化した襟裳岬周辺。その緑化事業の中心となってきた飯田常雄さんの息子で、父の跡を継ぎ現在も緑化事業に携わる飯田英雄さんに、お話を伺いました。

北海道日高地方にある襟裳岬は、もともと森に覆われ、コンブ漁が盛んな町でした。しかし、森林伐採が進むと森は砂漠化し、山の土が海に流れ込んでコンブがとれなくなりました。英雄さんの父・常雄さんをはじめ、えりものコンブ漁師たちは、豊かな海を取り戻すために70年以上の歳月をかけて緑化事業に取り組んできたのです。

### えりも町とコンブ漁について教えてください。

コンブ漁は7月から10月にかけて行われるんですが、ここ（岬地区）の海はよく荒れるうえ、荒れると長いんです。20日から1か月も続いてしまうので、7月は1回も海に出られないこともあります。最盛期の8月でも10日ぐらいしか出られないので、期間中に20日ほどしか漁ができません。寒流と暖流がぶつかる地域で頻りに霧がかかるんですが、目の前の船が見えないぐらいの状況でも出られるときは漁に出ま



左/強風と雨水により表土を失った山は、砂や石で表面が覆われ、石山と呼ばれていた。昭和28年の風景。  
右/風が吹くたびに赤い砂が舞い上がり、まるで砂漠に行くキャラバンのような姿で荷を運ぶ。

す。長さ5～6mの棹の先にL字型に鉤がついた鉤で、コンブをすくって船に手繰り上げるんです。船がコンブでいっぱいになったら陸に戻って水揚げ、「陸廻り」と呼ばれる人たちがすぐに干場に干します。コンブは天日に当たると粘りが出るので、くっついてしまうと干しにくくなるし、水揚げした船はすぐに漁場に戻ってコンブをとり、30分程度で何度も戻ってくるということもあって、短時間できれいに並べて干さなくてはならない。時間勝負なんですよ。実は、この作業がいちばん大変。陸廻りをするのは多くが女性なんですけど、やらないのは赤ちゃんを産んだばかりというくらい総出でやります。子どもは陸廻りをやってから学校へ行くし、職種に関わらず大人も総出でやるので、コンブ漁のときに遊んでいる人は誰もいません。うちのお袋も87歳までやっていくくらいです。

日高昆布というブランドとして統一されていますが、とれる地域によって厚みや幅など品質が違ってきます。岬地区は特上浜・上浜・中浜・並浜というランクでいうと中浜です。井寒台地区などの特上浜はコンブの幅が広くて短いのが特徴で、4mぐらい。岬地区のコンブは7～8mが当たり前、10mを超えるものもざらで、長いものは14mになります。コンブの長さは海の深さに関係していて、浅いと長くならず、光合成もしやすいから幅が広く厚くなるんですが、岬地区のコンブは深いところから光を求めて伸びていくため長くなり、幅や厚みがなくなるので中浜Cになってしまう。ただ、水揚げ量はえりも町でもトップなので、量でカバーするんです。

### 英雄さんが常雄さんの跡を継がれるまでにどんな経緯があったんですか？

子どもの頃は海が真っ赤でした。荒れ果てた山は強風と雨水によって表土を失い、地表に現れた赤い砂が海に流れ込んでいたんです。風になれば少しは青くなるけれど、荒れればかくはんされてまた赤くなってしまいます。陸でも風が吹けば砂が舞うから、視界が真っ赤になって何も見えなくなるんです。正面を向けずに、ランドセルを背負った背中を風上に向けながら歩いてましたよ。コンブはほぼとれないし、泥昆布と呼ばれて質も悪い。だからこの辺りはみんな貧乏でした。うちの親父もそうだったけれど、コンブ漁の時期以外は出稼ぎに行き、残った年寄りや嫁さんが浜でコンブを拾って細々と生活していました。作物もとれないので、食べるのはイモやカボチャばかり。白米はほぼ食わずに麦飯が主でしたね。



緑化とともに青い海が戻り、コンブがとれる量も増えた。



分が光ろうなんていう気持ちはさらさらしない人だった。どうして何も言わないのか聞いても、「いいじゃないか、それで。」と言う人だった。だからこそ、覚悟を決めたんです。

**親子で仕事をするようになってからは  
どんなことがありましたか？**

帰ってきてしばらくは、コンブ漁をしながら建設会社で仕事をしていました。しかし、親父を含め、緑化事業をしている人たちが年を取ってきたこともあり、ぼちぼち若いもんが跡を継いだほうがいいんじゃないかということになって、建設会社を辞めて一緒に緑化の仕事を始めました。苦労している姿を見てきたので、「よしよかった。」という気持ちでした。

ただ、うちの親父は気骨のある人だけど気が短いかから、よくけんかをしました。緑化に加わった頃に土木作業をする機会があったんですが、若かったのもあって、こんなやり方じゃ駄目だと怒っちゃったんですよ。緑化事業の開始当初からやっている人たち、特にうちの親父なんかはなんせ手作業でやってきたものだから、ツルハシとスコップで仕事するんだと言って機械化なんて頭になかった。これでは仕事が遅れるし、けが人が出ても困るということで、ショベルカーを借りてきて一気に仕事を進めたら、何も言わなくなりましたね。

重機で深く広く側溝を掘り進めることによって、植林した苗木が枯れてしまう原因となっていた、土の中にある水の層から水を排出することができたんです。意地もあって、1人で総延長42kmぐらい掘ったかな。そこからクロマツがぐっと育つようになり緑化が進んだのは、大きな転機だったとも思います。そこで親父も、自分の時代は終わったという気持ちになったのかもしれませんね。



英雄さんが重機を導入するまでは、すべてが手作業だった。

そんな状況もあり、長男が跡を継ぐのが当たり前の時代でも、親父はそんなことは一切言わなかったんです。ここでコンブ漁をやっているも駄目だと、外に出て働いたほうがいいんじゃないかと思ったんでしょうね。私も跡は継がないという気持ちでした。苦小牧の私立高校へ進学して大学へ行こうと思っていたし、そのときは親父が元気でしたからね。でも、高校3年生のときに親父が腎臓を悪くして人工透析をしなくてはいけなくなったんです。卒業間際に、帰ってきてくれないかと電話がかかってきました。しばらく悩んだけれども、帰らなきゃならんと思いました。親父が病気なら仕送りしてもらえないという現実もあるし、ずっと手伝ってきたからお袋が大変になるということもわかっていたので。

そして、親父はなんでもがむしゃらにやる人で、緑化事業の柱としてさまざまな功績をあげてきたが、自

**世代交代をした後の  
緑化事業について教えてください。**

親父の代では、えりも式緑化工法<sup>※1</sup>で草を植える緑化(草本緑化)を約20年かけてやり遂げ、そこから植林による緑化(木本緑化)を進めてきました。今では砂漠化していた192haの土地のほぼ100%とっていいほど植え込みが済んでいて、広い森が育っています。ただ、森は植林したクロマツが多くを占めています。ここから、砂漠化する前に生えていた広葉樹の森へと変えていくのが次の目標です。

クロマツがある程度育った頃、マツクイムシなどの病気が出たら全部枯れてしまう。だからこれからは広葉樹を植えなきゃ駄目だ、ということになり、まずは間伐<sup>※2</sup>を行いました。もともとクロマツは通常の植林なら1ha当たり2000~3000本のところを、防風のために1万本以上植えていたので、列状間伐といって、光を入れるために、伐採してその間に広葉樹を植えていくんです。いろいろと試行錯誤しながら広葉樹の森に変化させていくのが私の役目だと思っています。ただ、親父たちと一緒に木を植えることしか考えてこなかったから、木を切るという感覚がなかったんですよ。最初は木がかわいそうでね、涙が出ましたよ。切ったものはチップにして牛の寝床となり、それがまた肥料となって粗末にはされなかったんですが。

ここ10年は郷土樹種であるカシワをはじめシラカバやミズナラ、アオダモなどを植え込んでいます。また、シカに食べられる被害が出たために始めたのが、直径10cm、高さ1.4mの植生保護管で苗木を守る方法。これが、海からの塩害を防いで寒いときの保温にもなり、中に水滴ができることで水の管理もできて、苗木の8~9割が枯れなくなったんです。今は、クロマツの間に植生保護管で守られた苗木がずらりと並んでいます。

**海と森の両方に携わることで  
見えてくるものはありますか？**

海から見たら、この辺り一帯がずーっと緑なんですけど、それを見るとほっとするんです。森が育つにつれて海がどんどん青くなる。コンブもよくとれる。腐葉土から栄養素が流れてきて、秋味<sup>※3</sup>などの魚がどんどん寄ってきて、漁獲高もぐんと増えた。つくづく自



浜辺に打ち寄せられた雑海藻(ゴタ)を拾い集めている様子



格子状に見えるベルトユニット工法。緑色の部分がクロマツ、白く見える部分はカシワの植栽地。並行して排水用の側溝を掘る作業も進めていた。



重機の導入によって作業効率がおよそ3倍になった。



広葉樹の苗木を白い植生保護管で守っている。

※1 えりも特有の強風によりまいた種子が飛ばされるので、飛砂と乾燥防止のために雑海藻(ゴタ)をかぶせる工法。その後は肥料にもなる。(→P.5)

※2 森林の成長に応じて樹木の一部を伐採し、過密になった林内密度を調整すること。  
※3 産卵のため秋に遡上する鮭の中でも、遡上で味が落ちる前の脂ののった旬の鮭のこと。



強い風にさらされて、同じ方向に傾いているクロマツの森



現在の百人浜

然の大切さというものを実感しますよ。親父も「漁師だからって海ばかり見ていたら駄目だ。山が荒れたら海も荒れるんだ。山が豊かなら海も豊かになるんだ。」とよく言っていました。草本緑化が完了する昭和45年あたりから海は青くなっていったけれど、海の底に沈殿した土や砂は流れていかないから、荒れたときには舞い上がって海が濁る状況が続いていました。それを除去してくれたのが昭和59年の流氷です。一気に海が青くなり濁ることもなくなりました。また、流氷が沈殿物だけでなく、邪魔な雑海藻（ゴタ）をはぎ取ってくれたので、コンブの胞子がたくさん付いたん

です。その年はまだコンブの赤ちゃんだったのでとれなかったんですが、翌年は豊漁となりました。流氷が来た日は、北東の風がすごくて、ガラガラというすごい音の後、ゴーツという音がして……今までに聞いたことのない音で目が覚め、沖を見たら一面真っ白でした。あの流氷は神様みたいなもので、何十年かに一度の奇跡でした。また来てほしいものですが、なかなかそうはいかないでしょう。

温暖化が原因でしょうが、最近は海水温度がどんどん高くなってきているのを感じています。昔は8月でも漁のとき海に手を入れたら震えるほど冷たかったのに、今は水の中のほうが温かいんですよ。ああ、昔と全然違うなと思います。令和3年には赤潮が発生して名物のツブ貝がいなくなり、そのツブ貝を捕食するタコもいなくなってしまった。そして、タコが食べていたズワイガニが今年になって大量発生している。そのズワイガニがカレイ漁の網にかかり、網が破れるなどの被害が出るというふうに、連鎖的にさまざまなことが起こっています。

**これからの海と森についてどうお考えですか？**

今の若い人たちはひどかった時代を知らず、緑化された森を見て育っているから、元から森があったような感覚になっているようですね。だから、学校でも中高一貫で教えているんです。緑化事業の話をして、実際の写真などを見せれば森の大切さは一目瞭然。その後には植樹体験や枝落とし体験を行うんです。<sup>※4</sup>これを機会に自然について考えてもらえればいいなと思います。子どもたちには、自然を守っていってもらわないといけないですからね。そして、若い漁師たちにも同様に伝えていかなければと考えています。



左／緑もなく、海も赤く濁っている緑化事業開始前の襟裳岬全景  
右／緑化が進み、海の青さを取り戻した襟裳岬全景



展望台からの眺め。一面に広がる緑の森を見渡すことができる。



苗木を強風から守るハードル・フェンス



次代を担う子どもたちを中心に、地元住民が植樹を行っている。

緑化の仕事は私を中心に、コンブ漁をしている人たちが30年以上やっていますが、これからは次世代につないでいかなければなりません。今は高校を出てから漁師になった私の息子が緑化事業に加わり、仕事を覚えてきていますから、その後入ってきた若い人たちと共によくやっていってくれるでしょう。3代にわたってこの森に関わるというのは、なかなかないことかと思えます。親父と私とで70年以上<sup>※5</sup>やっているけれど、それでもまだまだ足りない。クロマツの森が育って緑化された時点でやっと折り返し地点。そこから、人の手を入れながら本来の広葉樹の森にしていくことを始めるんです。ここから同じだけの時間がかかるのか、それ以上かかるのかはわかりません。

やはり、一度森を失くせば元に戻すというのは100年単位で考えなければならないということなんです。

写真提供：林野庁 北海道森林管理局

日本文教出版『中学道徳あすを生きる 2』には、緑化事業に取り組む飯田常雄さんたちの姿を描いた「よみがえれ、えりもの森」を掲載しています。



※4 中学2年生でえりもの緑化の歴史などに関する講演を聞き、再生段ボール紙の植樹ポット「カミネッコン」を作った後、植樹体験を行う。高校では枝落としの必要性を学んだ後、中学時代に自分が植樹した場所を観察し、枝落としの体験を行う。

※5 昭和28年に国有林野事業による緑化事業が開始された。令和5年に70周年を迎え、記念行事も行われた。

# 「深い学び」と 「問い返し」を考える



「深い学び」の実現に向け、道徳の授業の中で行う「問い返し」。その役割や重要性、深い学びと道徳のおもしろさについて、島恒生先生と川野貴寛先生に語っていただきました。

畿央大学大学院教授 島 恒生  
 (「小学道徳 生きる力」「中学道徳 あすを生きる」監修)

徳島県阿南市立那賀川中学校教諭 川野 貴寛  
 (「中学道徳 あすを生きる」編集委員)



## 道徳の教科化以降の意識変化について

**川野** 私は今、徳島県の阿南市<sup>あなん</sup>というところで中学校の教員をしています。教科化されて4年がたちますが、道徳の授業に苦手意識をもっている先生は多いと思います。しかし、私の体験でいうと、県の研究大会をきっかけに研究を重ね、いろいろな手法を試しながら学校全体で道徳に取り組んでいたときに、生徒たちが道徳を通じて変わってきたという実感があつたんです。考えたり意見を交換したりすることが楽しい、今日の道徳が楽しみだ、と日記に書いてくれる生徒も増えていきました。ほかの先生方も同じような変化を感じていたと思います。

ただ、発問を書いたワークシートを渡し、淡々と順番通りに進めていくという先生もいまだにいて、それではおもしろくないと思っています。私の場合は、まずこの教材で何を考えさせたいのかというねらいを自分の中ではっきりさせ、前段などでそこに向かわせるようにして中心発問を投げ掛けます。生徒たちもそのあたりは予想がつくので、「こう言えばいいんでしょう。」というような表面的な答えを返してくるんです。その答えに対して、問い返しで突くようにしています。その後は、中心がぶれないようにだけ気を配りながら、授業の流れに合わせて伸び伸びやっています。

**島** 確かに、生徒は「こう答えればいいんでしょう。」と必ず考えますから、そこを裏切る授業ができるかどうかがとても重要です。先生と中学生が考えることはそんなに変わりません。だからこそ、先生がねらいは何かということをしっかりつかんで授業に入ることが大事だと思います。そうでないと、授業中に学びを深めるなんてまず無理ですからね。

## 深い学びにつながる問い返し発問とは

**島** 私は、「問い返し」よりも「切り返し」という言葉がしっくりきています。切り返しとは、切りかかってきた相手に対して切られないように返す剣道の技で

すが、道徳の切り返しはこれではありません。切り返しには「田<sup>た</sup>解<sup>ほど</sup>き」という意味もあるんです。田解きとは、固くなった田の土をほぐすこと。こういった意味も踏まえて、子どもの発言の中にあるいろいろな意味をほどこいていくことが、問い返し発問において大事なのだと思います。授業を深める際には切り返しの視点が重要だと思うのですが、いかがですか？

**川野** 私は、表面的なところからさらに深い考えへと入っていくときに、生徒を立ち止まらせるような発問が「問い返し」、違う視点を与えるのが「切り返し」というイメージをもっています。例えば、「優しくすることが大事。」という生徒の発言に対して「じゃあ、こういう場合は優しさになる？」と返すのが切り返しですかね。問い返しは深める、切り返しはベクトルを変える。どちらにせよ、授業を深めるために使うものだと思っています。あくまで私の感覚ですけども。

**島** 先生によって言い方はさまざまですが、大きく考えると3つの問い返しがあると思います。

1つ目は、行動レベルの答えが子どもから返ってきたので、もう少し心の中に入りたいという場合の問い返し。例えば、教材中の言葉や行い、姿に対して「そのときの心の中はどんなものなのだろうか。」と、道徳として考えたい部分に迫るための問い返しです。

2つ目は、子どもの発言の意味をみんなでもわかり合うために「どういう意味かもう少し教えて。」と掘り下げようとする問い返しです。

そして3つ目が、問い返すことでもっと深いところに入っていくための問い返し。優しさでいうなら、「優しさが大事。」という答えに対して「そこがわかっているのになぜ私たちはできないのか。」と深めていくと、人間の本质や心のさらに深いところへと迫ることができ、中学校ならではの学びとなります。「揺さぶり」も同じといえますが、「揺さぶり」と「問い返し」と「切り返し」は確固とした定義があるわけではないので、人によって使い方が違うと思います。

**川野** 問い返し、切り返しがない授業は、単に表面的なことだけを言わせるもので、そもそも成立しないよ

うな気が私の中ではするんですが。

**島** おっしゃる通りですね。生徒からの一言目で終わってしまう授業というのが現実にはあるんですよ。意見を言わせて、それを黒板に書き、いろいろな意見が出たね、で終わる授業。問い返しがない授業は単に発表を記録しているだけになり、全く深まらないのではないのでしょうか。

## 「問い返し」と「補助発問」の違いとは

**島** 私の理解では、先ほどの3つ目の問い返しと補助発問は同じ役割です。だから、補助発問として事前に準備する場合もあるだろうし、その場で出てきたら問い返しになる。また、揺さぶった場合でも、結局はそれが補助発問といえるのではないのでしょうか。川野先生は、補助発問と問い返しは別であると考えていますか？

**川野** ねらいの中心を考えさせたいと思っても、中心発問だけでは到達できない、まずはこう考えてからでないとそこに向かうことができないのではないかと同時に、補助発問を使います。そして、生徒からの思いや考えに対して、さらに問い返しで思考を深めていくという感じです。どちらも、ねらいとするところに向かいやすくするために使うという点では同じなので、あまり厳密に分けていないかもしれません。

**島** どちらも基本発問や中心発問を補い、より深めるための発問ですから、補助発問と問い返しを分けて考えることはあまりないです。ただ、補助発問は指導案に用意しているもので、授業の流れの中で思いつく問い返しを補助発問とは言わないかもしれないですね。

**川野** 確かにそうですね。教材にもよりますが、中心発問だけでは弱い場合には、生徒の反応を想定して補助発問を用意しておきます。中心発問がスタートで、そこからはやり取りですよ。ただ、中心発問だけで終わる授業はないと思います。

**島** 時には、補助発問として用意されていたものを基本発問や中心発問にもってくることもありますし、そ

れは自由なのではないでしょうか。指導書では、補助発問ではなく留意点として書かれていることもありますね。何にせよ重要なのは、川野先生のように生徒の意識や思考の流れを想像して考え、どこで補助発問や問い返しを行うかということ。指導書に書かれている通りに聞くのではなく、一旦自分のものにしておかなければなりません。

## 問い返しを実践する授業とは

**川野** 私は、まず教材を読んでねらいや道徳的価値について自分が理解することから授業準備を始めています。「何を考えさせたいのか」をいちばん大切に、発問などは指導書を参考にしながら、ガチガチに決めてしまわず必要最低限にしておきますね。あとは授業の中で生徒とやり取りしながらになりますが、授業の中で「この教材はここがポイントだったのか」「この部分が効いているのか」と気づくことがときどきあるんです。授業は生き物なので、アドリブで進めることも多いです。

**島** 全員がそうではないですが、中学校の先生は、「教える」「伝える」ことを強く意識している人が多い印象です。しかし、道徳以外の教科でも考えさせずに教えるだけでは、子どもが受け身になってしまいますよね。

**川野** その傾向はあるかもしれませんね。私の場合は、どちらかという意図的に授業を止めるんです。中心発問であっても、生徒たちは最初はパツと答えられるんですよ、予想の範囲内だから。そこから、例えば思いやりならば、「何をもちって思いやりになるのか」「教材前半のここは思いやりになるのか」といった深いところを問い出すと授業が止まる。そうやって初めて考え出したな、ここからがスタートだな、と思います。それが無い授業には発見はないし学びもないのではないのでしょうか。

**島** 川野先生とは逆に、中学校の先生は止まったら怖いと感じる人が多いですね。そこからがおもしろいの

に、止まったら困ってしまうんです。止まったところから始まるという川野先生のように、そこを楽しみができるのか、怖さだと感じるのかは大きな違いです。

**川野** 考え始めているから沈黙するのであって、ここでほかの生徒を当ててしまったら、せっかく考え始めたものが台無しになってしまうので、私は待つようにしています。

**島** 考えているのか、伝わっていないのかは、そのときの生徒の目を見ればわかるじゃないですか。そこはすごく大事。道徳のおもしろいところは、先生のねらいよりもさらに深い考えが放り込まれてくること。そこが授業での発見ですよ。道徳的価値について多面的・多角的に考えるということになるので、幅をもってやればいいんです。ただ、気をつけなければいけないのは、例えば「思いやり」をやっているのに「友情」へずれてしまうようなこと。あくまでも一つの内容項目を深めていくようにしないと。

**川野** そうですよ。教材によっては、いくつかの内容項目をカバーできるものもありますが、授業の中で生徒から違う内容項目で考えた意見が出てきたら、発問自体が失敗していると思います。

**島** あとは伝えよう、教えようではなく「語らせよう」とすることが大事。中学校では、普段、先生に世話をかけているような生徒が活躍するんです。ほかの生徒たちと違う人生を生きていますから、興味深い意見を

出してくれます。そこでもっと話すように促して、みんなでじっくり聞くんです。そうすると、そういう見方もあるのか、と教室全体へ広がっていき、その生徒はどんどん道徳の授業が好きになっていくというパターンが中学校ではよくあります。

**川野** ストレートな言葉や、ふざけ半分の話方だったりするので、みんな笑うんですが、本質的なことを突いているな、というときがありますよね。真面目な子ほど教員側が求めていることを考えて当てようとするので、読みやすいといえば読みやすいけれど、ストレートな意見や弱さを含んだ考え方はあまり出ない傾向にあります。

**島** それはありますね。いい意見が出た場合に大切なのは、先生も子どもと一緒に「今のはどういうこと？」と、全体に投げ掛けること。そうすると伝えるのではなく、共に考える授業になるんです。出てきた意見に対して「今のはいい意見だとわかっているか？」と確認する授業がよくありますが、それは「教え込み」の授業だと私は思います。先生もわかっていないというスタンスで問い返すやり方のほうが、生徒にとって自然な流れができるんです。

**問い返しを含め、深い学びに関する悩み**

**川野** 島先生のおっしゃる通り、道徳の授業に慣れていない頃は、止まってしまうと怖かったんです。それはやはり、自分自身が受けてきた、ワークシートを使って教科書をなぞるだけの授業のイメージがあったからというのがあります。教科化される前はそれぞれ自分で教材を準備していたので、基本の流れが書かれた指導書もなく、それも怖さにつながっていたんだと思います。

今は自信がついてきたというのがありますが、自由に楽しんでいいんだという感覚でやっています。そのくらいのスタンスのほうが子どもたちにも学びがあるのではと思っています。

**島** 期待した答えを出させるためではなく、生徒が自由に話した中で見つけていってくれるのを楽しむというのはいいですね。

**川野** ただ、読んだだけで感動できてしまうような教材だと、逆に不安になってしまいます。読んだ内容以上の答えが出てこないような気がして。一見難しそうなの教材のほうが、柔軟にいろいろな意見が出てきそうだと感じています。

**島** どんな場合でも、その先をねらわないといけない

んですよ。「どうして私たちはこんなふうに関心するの？」と、もう一步先にいくのが大事なんです。これもまた、切り返しであり問い返しですよ。やっぱり、視点を変えつつ「深めていく」のがとても重要で、それが多面的・多角的な思考につながるわけです。

見るからに正しいことを書いている場合は確かに難しいけれど、ねらいはそこにはないですからね。「それを支えているものってなんだろう。」「この人の努力の正体ってなんだろう。」というようにもっていったらいい。中学校の道徳は、人間としての生き方についての考えを深めるものだから、人間の「弱さ」を扱うと深まっていきます。「それはわかっている、でも難しい、どうしてだろう。」と進めて、「結局のところその正体ってなんだろう。」と一緒に考えていけるんです。当たり前なことが書いてあるな、という認識だけだと、浅くなってしまっても先生も生徒もおもしろくないですよ。

**川野** そうですね。やはり偉人ものなどは説教的になりやすく、難しいと感じてしまいます。やりやすいのは最初に人間的な弱さが出ているもの。そこに共感できて、ぐっと価値が深まります。すごさと弱さ両方の要素があるといいんです。

**島** 偉人の教材であっても先生自身が心を開き、「確かにこの人はすごいけれど、こんなことできないよね。」「なぜできないんだろう。」と、反省ではなく弱さを認め合うんです。そして、その人間の本質を見つけにいけるような問い返しを行うんです。「その人を支えている心や考えの正体はなんだろう。」と。実は、その正体は自分たちの中にもあるんですよ。気づいていないだけで。そこに結び付けていくと、弱さのない教材でも難しくないと思います。

つまり、みんなでまず「弱さを認め合う」んです。それを抜きにするときれいごとになってしまうし、「この人は自分たちとは違うから。」で終わってしまう。根っこの部分では同じ人間であって、中学校の道徳は人間の生き方について考えを深めるものだから、そこを突き詰めていく作業こそが重要になります。

**「深い学び」と「問い返し」においていちばん大切なもの**

**川野** 繰り返しになりますが、「いかに深めることができるか」が重要なと思います。自分が深まっていけないと意味がない。前提としてこちらが深さをもってその道徳的価値について正しく理解しておけば、生徒

を深いところまで誘い込めるやり取りが生まれるのではないのでしょうか。名作の教材だと頻りに研究題材に使われ、いろいろな指導案もあるけれど、その通りにやっても全くうまくいかないことも多いです。「君たちはまだ浅いんだぞ、これはもっと深いんだぞ。」という教え込むスタンスだと、生徒たちは考えません。目の前の生徒に対する理解があって、そのやり取りを楽しんだうえで「一緒に深いところまでいってみよう」というスタンスであれば、自然とベストな発問が出てくると思います。

**島** この子はどういう考え方で返してくるかな、と楽しみに待つのが道徳科の授業だと思います。ありきたりじゃなくて、この子らしいという言葉が返ってくることもあるし、この子はこういう考え方をするんだな、と思わされることがあったりもしますから、まずは待つ。それは結局のところ、川野先生のおっしゃる「深まり」につながっていくんです。先生方は構えてしまうけれど、中学校の道徳は休み時間の雑談だと思ってやればいい。どんどん言葉を発する雰囲気の中で、一つのテーマをやればいいんです。「深まりを待つこと」「弱さを扱うこと」「先生も弱さを出すこと」。そうすれば必ず子どもたちは乗ってきます。じっくりやればいいですよ。

**人間の本質を見つけにいけるような問い返しで、先生も一緒に「弱さを認め合い、共に考える」ことが大事。**

川野先生

島先生

**授業を止めるような問い返しをすると、生徒が考え始める。そこがスタートだと思います。**

道徳の学習における応用編です。基本となる22の内容項目は、それぞれ独立しているわけではありません。それらは密接に関わり合い、また競合する場合があります。ここでは、内容項目間の関係をわかりやすく解説し、道徳的価値の本質やおもしろさに迫ります。

### 今回のテーマ

「生命の尊さ」  
「自然愛護」

監修：広島大学名誉教授 越智 貢  
共著：福山平成大学教授 上村 崇  
北海道教育大学准教授 奥田 秀巳

### 生きることと死ぬこと

生きとし生けるものは、すべていつかは死ぬ運命にあります。「生死一如」という言葉があるように、生まれることと死ぬことは表裏一体であり、生き物から切り離すことができません。ただ、平穏な日常生活を過ごす中では、生と死の問題についてことさら考えることはないかもしれません。私たちは、気づいたときにはすでにこの世界に生まれており、自分が生きていることは当たり前のことだからです。

### 生命のかけがえのなさ

そうした私たちが生や死について考え始めるのはどのようなときでしょうか。生命の誕生の瞬間を記録した映像を見たり、自らが生まれたときの話を家族から聞いたりしたことがそのきっかけとなった人もいます。あるいは、かわいがっているペットや身近な人の死に向き合ったときに、失われた命は二度と戻らないという生命の無常を突きつけられた人もいます。このように、生まれる場面や死ぬ場面に遭遇するとき、生と死が人知を超えた何かに支配さ

れているような想いに駆られるに違いありません。運命や摂理という言葉はそのための用語でしょう。そして、私たちは、死を伴うそれぞれの生、つまり繰り返されることのない一回限りの時限的な生が、唯一無二の「かけがえのない」ものであるという事実に気づくのです。しばしば語られる生命の尊さは、この「かけがえのなさ」と深く結ばれています。

### 自然のかけがえのなさ

実は、自然も同じです。当たり前のようにある自然も「かけがえのない」唯一無二の存在だからです。目の前に広がる自然の光景が、生態系の絶妙なバランスの中で成立していることを忘れてはなりません。自然の生態系は、気の遠くなるような時間をかけて、限りない生命の誕生と死の上に形成された、いわば奇跡のシステムです。自然は、生態系の破壊が進めば二度と元通りには戻れない「かけがえのない」ものなのです。私たちが生命を維持するためには、大気、水、植物、動物などが不可欠ですが、それらが自然の賜物であることに思い至れば、私たちはかけがえのない自然に

よって生かされていると言わざるを得ないでしょう。少なくとも、私たちは決して自分の力だけで生きているわけではないのです。

### 自然を愛することと生命を大切にすること

自然の中では、大気や水など多くのものが、私たちの想像をはるかに超える規模で循環しています。そして、この自然のサイクルのもとに何百万種もの多様な生物が複雑に絡み合って共存し、生態系のバランスを保持しているのです。特定の種を絶滅させるだけでも、このバランスが崩れ、将来誕生するはずの生命が危機にさらされることになりかねません。とすれば、自然を愛することが、私たちに身近な自然環境に親しみを持ち、動植物を大切にすることにとどまらないことは明らかです。むしろ重要なのは、自然のサイクルやバランスに目を向け、それらが損なわれないよう配慮することです。無論、それはたやすいことではありません。しかし、将来の人々、つまり私たちの子どもたちやそれに続く世代に思いをはせれば、その配慮への意識は強くなるに違いありません。次代やその後の世代の生命を

守るためには、現在の私たちが自然を守り、それを彼らに手渡していく以外に方法はないからです。

### 生命と自然、そして戦争

生命のかけがえのなさ、生命を育む自然のかけがえのなさ、さらにその自然を次代へと引き継いでいくことの大切さ、これらのことに異を唱える人はいないでしょう。今日の国際的な目標となっているSDGsにもそうした意図が込められています。「持続可能な開発」は何より将来の世代に負の遺産を残さないことをめざしているからです。しかし、SDGsを唱えつつも、それを無にする行いが今も後を絶ちません。その最たるものが戦争です。戦争は、人命をはじめとして幾多の生命を破壊し、自然を戦場としてこれを蹂躪する行いです。ひとたび戦争が始まれば、生命を尊び、自然を愛しているはずの人間が、愚かにも、かけがえのない生命を、そしてかけがえのない自然を破壊するのです。私たちは、戦争が平和の敵であると同時に、かけがえのない生命やかけがえのない自然の敵であることを決して見逃すべきではありません。

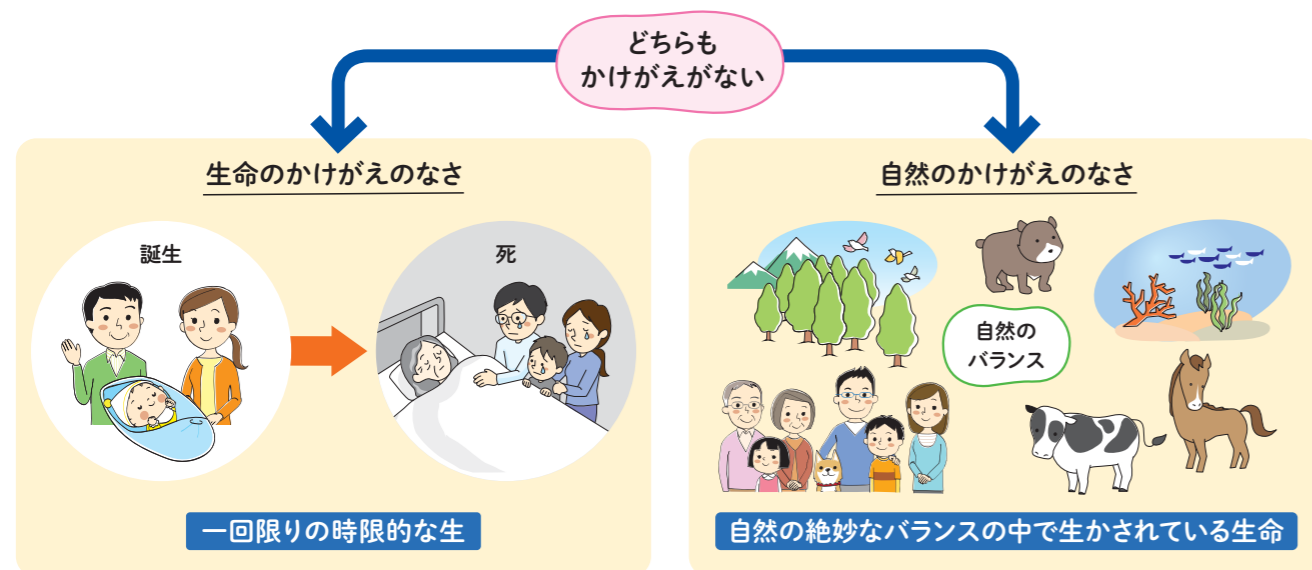


図1：生命と自然のかけがえのなさ



図2：自然のサイクルやバランスに目を向け、生命・自然を守る

# 児童の思いや願いを中心に据え、 児童自ら学びをつくる道徳科



広島大学附属三原小学校教諭 梅野 栄治

**教材名** たのしい がっこう (『しょうがく どうとく いきる ちから 1』 日本文教出版)  
**内容項目** C「よりよい学校生活、集団生活の充実」  
**主題名** たのしい がっこう

## ① はじめに

入学間もない1年生児童は、期待と不安を抱えながら日々生活している。だからこそ、児童が学校生活に対する期待や自信、学校に対する愛着をもち、健やかに生活できるようになることが何よりも重要である。そのような心身共に安定した日常生活が基盤となり、児童が小学校でさまざまなことを学び、経験する中で、よりよく生きる力が育まれていくのではないだろうか。

そこで、本実践では、児童の学校への愛着を深め、学級や学校で楽しく生活しようとする心情を育てることを主なねらいとし、「特別の教科 道徳」と他教科とを関連させることや教材の効果的な活用に着目して、児童の思いや願いに寄り添いながら、道徳的な学びを児童と教師が共につくっていくことをめざした。

## ② 本実践における 道徳的心情を育むための手立て

### (1) 児童の思いや願いを中心に据えた 道徳科と他教科との関連

1年生の学習は、生活科を中心に各教科を関連づけながら学習を進めることが多い。そこで、本実践でも、道徳科と生活科を関連づけて児童の道徳的心情を育むことができなかと考えた。ここでは、児童が今現在抱えている思いや願いに寄り添いながら、それらを学びの中心に据え、そこに教師のねらいを織り交ぜて、児童自ら学びをつくっていくことを大切にしたい。

### (2) 教材の効果的な活用

本実践では、1年生の道徳教材「たのしい がっこう」を活用した。本教材を異なるねらいをもって、道徳科に2回使用した点(第1次:4月中旬、第2次:

7月上旬)が、効果的な活用として挙げられる。

第1次「たのしい がっこう」では、「これからの学校生活への期待を膨らませ、学校生活を楽しくとする態度を養う」ことをねらいとし、本教材を学習の中心に据えて授業を行った。

第2次「たのしい がっこう パート2」では、「学校への愛着を深め、学校や学級で楽しく生活しようとする心情を育てる」ことをねらいとし、本教材を主に学習の導入や展開後段で部分的に活用した。

このように、本実践では同一教材を異なるねらいや活用方法で複数回学習することで、一つひとつの道徳科の授業に学びのつながりが生まれ、児童は、一つの内容項目についてより自分ごととして考え、自分の生活と重ね合わせながら学習に臨めるのではないかと考えた。

## ③ 本実践の実際

### (1) 第1次「たのしい がっこう」

本授業は入学間もない、4月中旬に行った。

まずは導入場面で、入学当初の児童の様子を写真で提示して、1年生になってどんなことが楽しいか交流し、共有する場を設定した。児童は写真を見ながら日常生活を想起し、共感的な雰囲気の中、それぞれが考えた楽しいことを友達に伝えることができた。

次に、「たのしい がっこう」の場面絵を提示した。すると児童からは、「私たちと同じだ。」「みんなニコニコしているね。」などのつぶやきが聞かれた。そこで、「絵の中の友達は、どんなことを思っているんだろうね。」「絵の中の友達は、どうしてみんなニコニコなのかな。」と問うと、「きっとみんなが優しくしてくれてうれしいんだよ。」「発表できたり、給食を残さず食べられたりしたことがうれしかったからじゃないかな。」など、絵の中の友達の心情に寄り添う発言や、「その気持ちわかるよ。だって僕もね……。」「同じようなことがあったよ。」などの共感する発言があった。

最後に、これから楽しみなことややってみたいことを、児童一人ひとりが星形の付箋に記入し、模造紙



に貼って、共有する活動を設定した。完成したものを、児童は「チャレンジスター」と命名し、「教室に掲示してほしい。」と希望したため、掲示することとした。

### (2) 道徳科の授業を契機とした自発的な取り組み

授業後、教室に掲示したチャレンジスターを見て、「僕もこれをやってみようかな。」「これはできたよ。」などの言葉を交わしながら、チャレンジスターを意識して生活している児童の姿や、チャレンジスターに書いたことを休憩時間にやってみる児童の姿も多く目にした。児童はこの取り組みを『かがやき』チャレンジと命名し、以後継続的に取り組む活動となった。

### (3) 生活科と『かがやき』チャレンジとの関連

6月中旬、4月から日常生活の中で継続的に取り組んできた『かがやき』チャレンジを振り返る時間を、生活科の学習と関連させて設定した。

振り返りでは、多くの児童が、自らの『かがやき』チャレンジに対して達成感や満足感を抱いていた。一方で、「みんなと仲よくなりたい。」という『かがやき』チャレンジについては、「学級の友達や学年の友達、縦割り班の友達とは仲よくなれたが、学校にいる大人の人とはまだ仲よくなれていないので、もっと仲よくなりたい。」という思いを多くの児童が抱いていた。

授業後段では、生活科の時間や休憩時間などを使って、学校にいる大人の人へインタビューする「みんな

なかよし だいさくせん!」をこれから実行していくことを、児童の思いや願いをもとに決定した。

### (4) 第2次「たのしい がっこう パート2」

本授業は、学校生活にも慣れ、『かがやき』チャレンジと、生活科の活動「みんな なかよし だいさくせん!」に取り組んでいる7月上旬に実施した。「学校にいる大人の人と仲よくなれていない。」という課題を解決するための生活科の活動「みんな なかよし だいさくせん!」に取り組む際の心情や、これからの自分のあり方について交流することが、学校への愛着を深め、学級や学校で楽しく生活しようとする心情を育むことにつながるのではないかと考えたことが、本授業を設定した意図である。

導入では、4月の第1次と同じ教材「たのしい がっこう」を活用した。今回は、児童一人ひとりが教科書を見ながら、4月の道徳の学習やこれまでの学校生活を想起できるように、じっくりと時間を確保した。児童からは、「4月に『がっこう だいすき』のお勉強をしたね。」「給食も残さず食べられるようになったよ。」など、学習や生活を想起したり、自分の成長を実感できたりしているような発言が聞かれた。

そこで、4月の第1次に作成した「チャレンジスター」を提示した。すると児童からは、「チャレンジスターを作ったね。」「そこから『かがやき』チャレンジが始まったよ。」「今も休憩時間にチャレンジし

広島大学大学院教授  
宮里 智恵 先生から



本実践の特長は、①児童にとっての学びの適期を捉えた実践である点、②児童の思いや願いを中心に据えながら、他教科や授業外の時間にも取り組みを広げている点です。

①については、小学校入学という一生に一度の大きなできごとを経験している時期(4月)に、児童の期待感や不安感、戸惑いを受け止め、それに寄り添いながら「学校」という場所の楽しさを共有し、安心感をもたせています。また、学校生活に慣れてきた時期(7月)には、再度同じ教材を用いながら、「今は学校をどんなふう感じているか」を話し合うことで、4月よりずっと安定した生活を送ることができていることに気づかせ、「やっぱり学校は楽しいなあ。」というより前向きな気持ちを共有させることができています。(P.17へ続く)



	学習活動 (◎中心発問、○基本発問、・予想される児童の反応)	◇指導上の留意点
導入	<p><b>1 4月当初の道徳科の授業や、これまでの学校生活を振り返る。</b></p> <p>○4月からの学校生活を振り返って、心に残っていることはどんなことですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・お兄さんやお姉さんとたくさん遊んだよ。</li> <li>・今は水泳の学習を頑張っているよ。</li> </ul>	<p>◇「たのしい がっこう」を活用し、教材の記述内容を確認することで、4月当初の道徳科の授業や、これまでの学校生活について想起できるようにする。</p>
	<p><b>2 1年生になってできるようになったことについて考え、交流する。</b></p> <p>○1年生になってできるようになったことや、今頑張っていることは何ですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・のぼり棒やタイヤ跳びができるようになったよ。</li> <li>・友達がたくさん増えたよ。</li> </ul> <p><b>3 生活科の活動「みんな なかよし だいさくせん！」を通して感じたことや考えたことについて想起し、交流する。</b></p> <p>○生活科の「みんな なかよし だいさくせん！」では、どんな人と仲よくなって、どんなことを感じたり考えたりしましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・あまりお話したことがない先生とお話しできてとてもうれしかったな。</li> <li>・話しかけるときにドキドキしたけど、先生たちが優しくて安心したよ。</li> <li>・先生にインタビューしたら、いろんなことを知ることができて、もっと先生を好きになったよ。</li> <li>・教科書に出てくるお友達と同じように、僕たちもニコニコになれたね。きっと同じ気持ちだね。</li> </ul> <p>○これから、もっと学校を大好きになるために、いろいろな人どのように仲よくなっていきたいですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分から挨拶をして、先生たちともっと仲よくなりたいな。</li> <li>・給食を残さず食べて、給食調理員さんたちともっと仲よくなりたいな。</li> <li>・いろんな先生たちとお話ししたり、一緒に遊んだりしたいな。</li> </ul>	<p>◇4月当初の道徳科の授業で終末に作成したチャレンジスター（楽しみなこと、やってみたいことを星形の付箋に書いて模造紙に貼ったもの）を提示し、自分が何にチャレンジしたいと考えていたかを想起できるようにする。</p> <p>◇児童がのぼり棒やタイヤ跳びにチャレンジしている写真を提示し、児童一人ひとりの発言を肯定的に受け止め、学級全体に広げる。</p> <p>◇「いろいろな人と仲よくなりたい。」という児童の思いや願いをもとに、道徳科の授業と関連させた生活科「みんな なかよし だいさくせん！」の活動の写真を提示し、学習を想起することを促す。</p> <p>◇ここでは、学校にいる大人の人たち（先生や給食調理員、事務職員など）との関わりについて焦点化し、活動を通して感じたことや考えたことを交流する場を設定する。</p> <p>◇活動の際の不安や活動を通しての達成感、安心感、これからの学校生活に対する期待感などを共感的に受け止めるようにする。</p> <p>◇再度教材の場面絵に注目することを促し、場面絵の児童と自分たちに共通する心情について気づけるようにする。</p> <p>◇いろいろな人ともっと仲よくなるために、これからやりたいことについて考えたことを共感的に受け止めることで、児童一人ひとりがそれぞれの方法で、学級や学校で楽しく生活しようとする心情を育むことができるようにする。</p>
終末	<p><b>4 今現在、学校に対して抱いている気持ちを交流する。</b></p> <p>○みんなにとって学校はどんなところですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・先生や友達も優しく、とても楽しいところ。</li> <li>・学校で過ごすのがとても楽しくて、大好き。</li> </ul>	<p>○学校に対する今の気持ちを交流する場を設定し、学級全体でそれらの気持ちを共有することで、児童一人ひとりの学校への愛着を深めることができるようにする。</p>



ているよ。」などの発言が聞かれ、自分たちの思いや願いが中心となって、学習と日常生活がつながっていることに気づけているようであった。

「どんなことができるようになったの?」と問うと、児童からは、「のぼり棒」「タイヤ跳び」など、さまざまな答えが返ってきた。その中には、6月の生活科の時間に行った振り返りでは、十分には達成できていないと感じていた、「学校にいる大人の人と仲よくなる」ということに関しても、達成できたという答えが多くあった。



ここであらためて、「かがやき」チャレンジ」で十分に達成できていなかった「学校にいる大人の人と仲よくなる」ことに関して、生活科の学習と関連させて「みんな なかよし だいさくせん!」として取り組んでいることを押さえ、「学校にいる大人の人とも仲よくなったことについて、詳しく聞かせてもらえるかな。」と投げ掛けた。すると児童からは、「先生たちはみんな笑顔で優しくだよ。」「先生とタッチできてうれしかったよ。」などの発言が聞かれたため、これらの達成感、安心感などを共感的に受け止めた。また、あらためて教科書の場面絵に注目するように促し、「教科書のお友達と今のみ

んな顔を比べてみると、何か気づかないかな。」と問うと、「同じようにニコニコだね。」「うれしい気持ちと同じだね。」などの発言が聞かれた。

さらに、中心発問としてこれからの自分のあり方について問うと、児童一人ひとりが、「みんな なかよし だいさくせん!」を通して実感できた学校や自分自身への肯定的な気持ちに後押しされ、「もっと仲よくなりたいな。」「先生たちと〇〇をしてみたいな。」などの前向きな思いが多く聞かれた。

終末では、学校に対して抱いている気持ちを問うことで、自分の中に芽生えた思いを自覚できるようにした。児童からは、「学校が大好き。」「友達も好きだけど、優しい先生たちも好き。」などの発言が聞かれ、学校に対する愛着を深めているようであった。

#### ④ 終わりに

本実践では、児童の思いや願いを中心に据え、道徳科と生活科の学習を関連させたり、教材を効果的に活用したりすることを通して、児童一人ひとりがより自分ごととして切実感を持ち、実感を伴いながら自ら学びをつくる姿をめざした。このような児童中心の学びの中で、学級や学校で楽しく生活しようとする心情が育まれ、学校への愛着が深まったのではないかと推察される。

広島大学大学院教授  
宮里 智恵 先生から



②については、児童の思いや願いを焦点化し、児童の主體的な学びにつなげています。入学当初の不安な時期を乗り越え、これからの学校生活で楽しみなこと、やってみたいことを「チャレンジスター」に書いて積み上げていく中で、「学校にいる大人の人とも仲よくなりたい。」という目標が焦点化されました。思いが目標となったことで、児童は生活科や休憩時間においても自発的に行動しています。自ら動き掛けたことで、児童にとって学校はまさに「チャレンジしたい、チャレンジできる大好きな場所」となったことでしょう。

児童の思いや願いを学びの中心に据えるという明確な意図を、学びの適期を大切にしながら、2回の教材活用や他教科との関連など数々の取り組みに具現化した、たいへん優れた実践です。



# こんなコト、聞いてみました！

ちょっと聞いてみたいギモンに経験をもとにお答えいただきました。  
授業のヒントになったり、励みになったり。  
これからの道徳の授業に生かせる何かが見つかるかもしれません。

今回のテーマ

## 道徳授業に自信がない先生に声をかけるとしたら？



### 道徳授業の「守破離」

愛知県田原市立神戸小学校教諭 立花 英夫

「道徳って何を勉強するの？」と問われたら……。授業に自信がない先生なら、きっと答えに困ってしまうのではないのでしょうか。

道徳の教科化以降、各校で道徳授業が確実に行われるようになりました。華々しい討論のある授業に憧れる先生もいることでしょう。小学校学習指導要領の道徳科の目標には「道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」とあります。この目標を達成できれば、どんなアプローチもあり得るといえます。しかし、華々しい討論をめざすあまり、上辺だけ活発で上滑りした授業に陥ることも多いのではないのでしょうか。

能や茶道、武道の言葉に「守破離」というものがあります。伝統の型を「守り」、習得できたら次にそれを「破り」、最終的には独自に発展させた型から「離れていく」、というような意味で使われます。道徳にもまさに当てはまる言葉だと考えます。独創性は大事ですが、改善・改良のために元の型から離れて新たな型を創造したとしても、まずはきまりや基本を守り、身につけ、基本の型を忘れてはいけないといえるのだと思います。

道徳科の授業者として自分がまだ「守」の段階にあるならば、次のような型（基本）を守り、身につけることが大切だと考えます。背伸びせず身の丈に合うやり方を身につけて授業を楽しみましょう。

- ①指導要領と教材文を読み込み、ねらいを考える。
- ②中心発問を考え、付随する発問と後段を考える。

- ③教材の範読は納得いくまで練習し、心を込める。
- ④展開前段、後段、導入、終末の順に流れを考える。
- ⑤それぞれの過程の時間配分を決める。
- ⑥導入では、ねらいとする道徳的価値への方向づけの導入、教材への関心づけの導入など、「わくわく感」を高める工夫をする。
- ⑦板書は、場面絵の活用など、子どもも教師もその時間の学びが見えるような工夫をする。
- ⑧教材は安易に分割して提示しない。
- ⑨子ども一人ひとりがじっくりと考える時間を確保するため、範読後、発問後などの沈黙（間）を大切にす。
- ⑩登場人物について問うことで、人間の弱さも含めた本音が言いやすくなるので、安易に「あなただったらどうする？」と問わない。
- ⑪子どもの発言は板書しながら聞かず、表情を見て、うなずきながら聞く。板書はある程度まとめて書く。
- ⑫考えるための手法として役割演技やワークシート、話し合い活動を効果的に取り入れる。ただし、体験的プログラムだけで終わらないこと、方法的な解決の話し合いにはしないことに留意する。
- ⑬ワークシートは書かせる場面を最低限に絞り、たくさん書くことを求め過ぎない。
- ⑭子どもの発言や話し合いでの成長を評価し、その場ですぐ伝えるようにする。
- ⑮自己の振り返りの時間を必ず確保する。授業で学んだ価値に照らして、これまでの自分の生き方はどうであったかを振り返って考えさせる。
- ⑯終末では教師の説話のほか、子どもの作文、格言、歌など、子どもの心に残り余韻を残せるような工夫をする。ただし、決意表明的なことを発表させてはならない。

以上のような型がなぜ存在し、それを守ることで失敗が少ない授業への近道とされてきたのかを、まず理解することが大切なのだと考えます。基本型を習得し、その意味を理解したうえで、「破」と「離」の段階をめざしましょう。

## 地球の仲間からの メッセージ

獣医師、元大阪市天王寺動物園長  
長瀬 健二郎



舌を出すアオダイショウ

### ヘビ

動物園の動物たちは、人気者ばかりです。ただ、中にはごくごくわずかな人にしか好まれないもの、逆にいうとほとんどの人に好まれないものもいます。好まれない、というよりも嫌がられる、怖がられる動物たち……それがヘビです。

嫌がられる理由は、まず手足がないということでしょうか。ペロペロと出し入れする舌が嫌だ、という意見も聞きますし、耳がないのも奇妙だと言う人もいました。ただ、どの特徴にもきちんとした理由があり、生活するうえで最適だからそういう具合に進化した、という背景があるのですが……。

ヘビの先祖には手足がありました。しかし、落ち葉の下などで生活することを選んだので、手足があるとかって邪魔になり、手足が退化する方向に進化しました。おかげでほんの少しの間隙があればスイスイと入り込み、音もなく流れるように移動することができるようになりました。また、立木であっても手掛かりになる枝なしで登れます。それは、<sup>ふくばん</sup>腹板という左右に長いうろこを、木肌の微細な出っ張りに上手に連続して引っ掛けているからです。



最大で7m近くにもなるビルマニシキヘビ

舌を出し入れするのは、味を感じるのではなく、においを探すためです。舌の先が二股に分かれていること、また舌は左右に振られるだけではなく、微妙に上下していることに気づいた方もおられると思います。こうして空中に浮遊するにおいの強さの違いを立体的に捉え、そして口の中に戻った舌は上顎にある一對の穴の中に、表面に付着したにおいの元を届けます。この穴はヤコブソン器官と呼ばれ、敏感ににおいを感知することができ、においの発生源である獲物の位置、動きなどを瞬時に捉えます。

ヘビには耳の穴がないので音を聞くことはできないと考えておられる方もいるようですが、下顎の骨で空気の振動を感じ、それを<sup>じしやうちゆう</sup>耳小柱と呼ばれる小さな骨で音に変換して内耳に伝え、聞くことができます。

また、温血動物をエサにするヘビの中には、獲物のもつ体温、すなわち赤外線を検知する小さな器官が口の周りや顔の前面にあります。そこで0.003℃の温度差でも検知することができるので、たとえ真っ暗闇の中でも、まるでサーモグラフィーで見ているかのように獲物の位置や動きを感知し、正確に獲物を捕まえることができるのです。

今から3億年ほど前に両生類から分かれてそのような独自の能力を身につけ、現在まで生き残ってきているのです。この文章をお読みになった方が、少しでもヘビを見直していただければヘビも私も幸いです。



島先生と考える!!

今年もコラボ開催!

# どうとく発問ラボ × 道徳オンラインセミナー

「どうとく発問ラボ」は、道徳の発問を島先生と実践者の先生との対談形式で考える動画コンテンツです。ご好評につき、今年度も「どうとく発問ラボ」と「道徳セミナー in 東京」をコラボで開催。「どうとく発問ラボ」で検討した発問を使い、「道徳セミナー」では模擬授業を行います。よりよい授業づくりのご参考に、ぜひ「どうとく発問ラボ」をご視聴いただき、「道徳セミナー」にご参加ください!!

## どうとく発問ラボ

日文 web サイトで動画公開

2023年10月下旬 小学校「手品師」  
11月下旬 中学校「戦争を取材する」

発問ラボで検討した  
発問で模擬授業!

## 道徳セミナー in 東京

オンライン+対面で開催

2024年1月21日(日) 13:00~  
小・中の模擬授業、指導講評、島先生講演

※開催形式は、変更になる可能性があります。

### ●小学校「手品師」

**箱崎 由衣** 先生

東京学芸大学附属  
世田谷小学校教諭



### ●小・中学校

**島 恒生** 先生

畿央大学大学院教授



深い学びのある授業づくりのご参考に、ぜひご視聴ください!

### ●中学校「戦争を取材する」

**戸上 理子** 先生

東京都文京区立  
第九中学校主任教諭



「どうとく発問ラボ」の視聴、「道徳セミナー」参加申し込みはこちらから。  
※セミナーのお申し込み受け付け開始は、12月の予定です。



# どうとくのひろば

読者アンケートにご協力ください!



よりよい広報資料をお届けするため、先生のご感想、ご意見を左の二次元コードからぜひお聞かせください!

## どうとくのひろば No. 35

日文教育資料 [道徳]  
令和5年(2023年)10月12日発行

編集・発行人 佐々木 秀樹

日本文教出版株式会社  
〒558-0041 大阪府大阪市住吉区南住吉 4-7-5  
TEL: 06-6692-1261  
FAX: 06-6606-5171

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33679

## 日本文教出版株式会社

<https://www.nichibun-g.co.jp>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉 4-7-5  
TEL: 06-6692-1261 FAX: 06-6606-5171

東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井 1-2-16  
TEL: 03-3389-4611 FAX: 03-3389-4618

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院 3-11-14  
TEL: 092-531-7696 FAX: 092-521-3938

東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵 1-13-18-7F-B  
TEL: 052-979-7260 FAX: 052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似 9-12-1-1  
TEL: 011-764-1201 FAX: 011-764-0690